

唐丹町の考古学(四)

天照御祖神社の独鈷石

釜石市

森 一 欽



前回、小白浜遺跡を取り上げて以来、三年ぶりとなつてしまいました。縄文時代の資料として天照御祖神社の独鈷石を取上げたと思います。

天照御祖神社は三陸鉄道唐丹駅の南約二〇〇mに位置する神社です。この神社は修験の覚善院が元和元(一六一五)年に岩沢ノ神社を常龍山に移して社殿を造営したのに始まり、明治の神仏分離まで常龍山皇学寺大学院という寺院を合祀

していましたが、神社のみとし天照御祖神社となりました。この神社には釜石市内で二番目に古いとされる元和四(一六一八)年の碑を所蔵しており、出羽羽黒派の修験によるものと思われ

また、天照御祖神社には多くの伝説があり、大同二(八〇二)年征夷大將軍坂上田村麻呂が魁首大墓王が乱を起こし追討のため奔走し、また残党の常籠鬼を斬罰し、この常籠鬼を葬るために十一面観音とともに建立されたのがこの神社であるという伝説に基づいています。十一面観音は後に福寿庵に安置したが津波により流出したとのこと

なり、その後常陸坊海尊がその消息を探し天照御祖神社を訪れ六郎が亡くなったことを嘆き、六郎の身分を知った天照御祖神社では六郎を手厚く葬り大徳塚を建立したとされていますが、その塚も津波により消滅したそうです。なお、常陸坊海尊は、唐丹村に大杉神社を建立したとの伝説が残っています。また、神社では六郎が所持していたものは神社の宝物として長く保管されていたそうです。

今回紹介する独鈷石はこの宝物の一つと言われています。石材は凝灰岩と思われ、長さ一八・〇cm、隆起部六・四cm、凹部四・七cmで、やや弓状に沿った形状となっており、隆起部の上

このような縄文時代の遺物が寺社の宝物になる例はかなりあるのですが、この資料はいつ頃宝物になったのでしょうか？実際のところはおわかりません。しかし亀井六郎の話は伝説の域を出ないものの、この独鈷石は唐丹を訪れた蓑虫山人(天保七年一八三六)明治三十三年一九〇〇・岐阜県・本名土岐源吾)が描いており、その絵は名古屋市の霊鷲山長母寺に所蔵されている『蓑虫山人絵』の第十巻に収録されています。

蓑虫山人が唐丹に訪れたのが明治二十四(一八九一)年と考えられるので、少なくとも百二十年間は天照御祖神社に保管されていたことが証明されています。現代では考古学的な研究が広く紹介される時代となっていますが、それ以前の明治あるいは江戸時代の先人たちが、これらの遺物をどのようなものと考え、神社において宝物としたのかとても興味深いです。

参考文献

- 井上雅孝二〇〇七「神仏になつた遺物―縄文時代の再利用について―」『列島の考古学II―渡辺誠先生古希記念論文集―』
- 岩手県立博物館二〇〇七『石手を旅した絵師の足跡―名古屋・長母寺所蔵「蓑虫山人絵日記」I 図版編』
- 岩手県立博物館調査研究報告書第二十二冊
- 釜石市誌編纂委員一九七四『釜石市誌唐丹小史資料編』
- 釜石市文化財保護審議会一九八五『釜石の石碑』

